創成期の東福寺とその大工たち

TOHFUKUJI-TEMPLE AND CARPENTRY BUILDERS IN ITS FOUNDING TIME

永井規男*
Norio NAGAI

Tohfuku-zen-ji-temple had deep relation to the establishment of Zen style in Japanese architecture.

In this paper, I discuss the process of adopting Zen style in the buildings of this temple in the relation of the matters of their carpentry builders. Conclusions are as follows.

1. Tohfukuji-temple, founded in 1239, had converted to zen-proper institute in the moment of the construction of hattou (lecture hall) in 1270 s.
2. The establishment of Zen-style in this temple was parallell phenomenon to the begining of the succession of Daiku-shiki by one family using a letter "hiro" in their naming.
3. Probably, the using of zen-style in this temple, was pioneered by builder Suehiro and accomplished by Hirosada, conjectural founder of the daiku-shiki family of Tohfukuji.

Keywords : *Tohfukuji, Zen style, carpentry builders, early medieval ages*

東福寺, 禅宗様, 番匠大工, 中世初期

1. はじめに

鎌倉時代になって禅宗寺院が建立されはじめ、わが国の建築に決定的な影響を及ぼすことになった。では、そうした禅宗寺院に固有の様式とされる禅宗様が、禅宗寺院において確立されたのは何時ごろか、またそれに関与した建築工はどのような人たちであったのだろうか。これらは禅宗様の形成という問題のなかにおいて、きわめて重要な位置を占めるものであろう¹⁾。とはいうものの、史料の絶対的な欠如が、これらを論ずることをたいへん困難なものにしている。しかし、この点をすこしでも明らかにしておかなければ、禅宗様式やその技術に関する諸問題をより深く論じることとはできないと思われる。本稿は、こうした問題意識にたって、わが国の初期禅宗寺院における禅宗様式の形成とその建築工匠について考察を試みようとするものである。もっとも、初期禅宗寺院の工匠問題にまで及んで論じようとするれば、史料の関係上から、その対象は、ほとんど京都の東福寺に限られてしまうのである。そこに問題はのこるものの、しかし、五山制度形成以前の京都禅宗寺院界における東福寺のもつ役割を考慮に入れると²⁾、それに関する考察は、東福寺だけのことにとどまらず、より一般性のもつものとして受け入れられるであろう。

以下に述べるように、東福寺ははじめから禅宗寺院として出発したわけではないし、またこの時期の東福寺工匠史料というのも、かならずしも密度の高いものではない。そこで東福寺が禅宗寺院化する過程を検証し、それと対応してそこに登場する大工を、彼らの背景に可能な限り踏み込み、それらの結果を総和するかたちで議論をすすめてみたい。

2. 東福禅寺の形成に関する問題

東福寺の創立に関しては、太田博太郎、杉山信三両氏による研究があり³⁾、そこに異論を申し立てる余地は殆どない。しかし、細部においてはなお論ずべき余地が若干あるようである。

東福寺の創立に関してまず扱っておかなければならないのは、九条道家の「惣処分」⁴⁾の問題である。「惣処分」は、東福寺の創立期の建築状況を示すものと信じられているが、その内容、とくに東福寺の部分の内容は多くの矛盾を含んでいる。そこでまず「惣処分」をいかに見るべきかの問題から入ろう。創立期の東福寺の建築に関して信頼できる基礎的な史料としては、「惣処分」以外に「聖一国師年譜」⁵⁾と「東福寺大工広定請文案」⁶⁾とがある。仏殿造営にはじまる東福寺諸堂宇の造営経過とそれに関

* 関西大学 教授・工博

Prof., Kansai Univ., Dr. Eng.

連する大工とを、この二つの史料を対比するかたちで下に示す。

年次	聖一国師年譜	東福寺大工広定請文案
延応元 7.21	仏殿立柱	仏殿造営
8.5	仏殿上棟	【大工物部為国】
寛元 4	普門院建立	【末光】
建長 2	九条道家薨	
建長 7.6.2	仏殿落慶	鐘楼・経蔵・廊下造営
正嘉 2	仏殿北廊造営	【大工末広】
正元元	東福方丈あり	
文永 5	常楽庵創立	
文永 8	法堂・祖堂・祠堂	法堂・祖師堂・檀那堂
	造営	【大工末広】
文永 10	法堂落慶	
弘安 2	開山円爾辨円示寂	
3 世無関普門の代		温室造営 【定国】
		【大工定吉】
		【大工定国】
5 世山叟恵雲代 (—1301 寂)		中尊御光改修、諸堂作事、 【大工広定】

このように円爾までの時代の建築造営経過に関して、この二つの史料はほぼ同様の、相互に矛盾しない事柄を示している。「東福寺大工広定請文案」は14世紀の始めころ大工相論にからんで作られ、東福寺大工家が襲蔵していたもの。「聖一国師年譜」は14世紀前半の人である岐陽方秀が編集したもので、いずれも同時代史料とはいえないが、その内容に虚偽や作為を施さねばならないような性格のものでもない。この二つの史料が、その内容において、両者がほぼ一致し、とくに矛盾するところがないことは、上の建築造営経過が事実であることを、また物語るといえよう。

「惣処分」は建長2(1250)年11月に、九条道家が死を前にして遺した道家関係の諸寺院の堂宇等の目録、及び寺領・家領の処分案である。文書袖書によると法印仁基の執筆とあって道家の直筆によるものではない。さて、「惣処分」に記された東福寺は、仏殿・法堂・二階楼門・僧堂以下、禅宗寺院としてあるべき諸堂宇が完備したものとなっている。ところが、「惣処分」の東福寺の項の末尾に記された道家の述懐は、「数箇の堂宇を建立するなり」とあると同時に、また「但し、未作事のもの甚だ多し」ともあって、堂宇目録そのものの内容とは明らかに矛盾している。上記の二史料と照らしても、「惣処分」に記す鐘楼・経蔵・法堂・温室(浴院)などは道家没後の造営であることが明らかである。以上のことからしても、「惣処分」に記された東福寺の堂宇目録をもって、ただちに建長2年時の状況を表すものとすることはできない。もちろん、この東福寺堂宇目録は、まだ建っていないものを含めて、完成した時のあるべき姿を予想して書かれたという解釈もできよう。しかし、この堂宇目録

を子細にみると、五重塔婆だけは「件塔は東の岸上に建立す可し」と明確に将来建てるべきものとされているものの、法堂などは「建立す可し」という書き方はされていないのである。こうしてみると「惣処分」の東福寺の堂宇目録は、建長2年以降のある時点における、ほぼ完備した状態を書いたものを、道家が作成した当初の処分案の中に嵌入したものと考えられるのである⁷⁾。

そうなると、創立期東福寺の道家時代の堂宇の姿を、「惣処分」を通して見、そこから完成された禅寺が道家の生前にすでにあったとしてしまうと、事実を見誤ることになる。そこで、あらためて、禅宗寺院としての東福寺の姿がいかにして、いつごろ形成されていったかが検討されねばならなくなる。

【道家の造寺意図】 杉山信三氏が指摘されたように⁸⁾、「東福寺」の仏殿は、はじめは最勝金剛院の御堂として意図されたのであった。すなわちそれは禅宗寺院としての仏殿ではなかったのである。この仏殿造立の動機は明らかではないが、天福元(1233)年の藻壁門院(後堀川天皇中宮、四条天皇母)、嘉禎元(1235)年の摂政教実と続いた、九条家の将来にとって重要な役割を担う筈の子供たちの死という不幸に遭遇したことが、大きく作用したことは推測にかたくない。それが、延応元(1239)年の道家自身の罹病と比良山神託という体験⁹⁾を経て、最勝金剛院を拡大するという最初の意図が転じて、新規の寺院の開設へと移っていったものと推測される。東福寺の名称もこの転換を機に始められたと思われる¹⁰⁾。しかし、その転換はただちに禅宗寺院を志向したものではなかった。それは、寛元4(1246)年に春日社に納めた道家の願文¹¹⁾において、「真言止観禅門をもって本として」造寺していると述べていることから推測できる。円爾辨円を住持に迎えたのは、禅宗をその一部として加えようとしたことであろうが、むしろ入宋僧である円爾の下で、新しい風儀の造寺が行なわれることを期待したからであろう。そのことは道家が「惣処分」のなかで、造寺の方針について「偏に天竺晨旦叢林開堂の風俗を模す」とか「宋朝の風俗」と述べていることから推測できる。おそらく、道家は、最後まで、東福寺を禅宗寺院として考えたことはなかったのである。それは道家本人が遺書である「惣処分」において、「真言止観宗門を以て専宗となす」と述べていることから明らかであろう。

【円爾による禅寺化】 円爾が道家とはじめて出会ったのは、寛元元(1243)年2月、月輪別墅においてで、同4年には東福寺の北の普門院を与えられている¹²⁾。しかし、円爾が本当に東福寺に腰を落着けたのは、住庵としての常楽庵が創営された文永5(1268)年ころであろう。このころから東福寺は、禅僧としての円爾が統率する寺院、すなわち禅宗寺院としての性格を明確化してゆくのである。そのことは、3年後の文永8(1271)年から開

始された法堂と祖堂および祠堂の建設がよく物語っている。仏殿落成後、16年間も禅宗寺院にとって最重要の法堂は未建のままであった。この時間差のことは、これまで見過ごされているが、一考すべき問題ではあろう。これについては着手が遅れただけという解釈も可能である。しかし「惣処分」の堂宇目録には記載のない祖堂や祠堂の建築が、法堂建設と同時に進められていることに注意しなければならない。従来はこの祖堂と祠堂は法堂に付属させたものとの理解が普通であるが¹³⁾、「建長寺指図」に見られるように、仏殿の両側に付くものとして新たに付属させたという可能性もないではない。いずれにせよこれから明らかになることは、道家時代の建長7(1255)年に落成した仏殿には、祖堂と祠堂は付属していなかったということである。すくなくとも、南宋五山式の伽藍構成では必須の、したがって禅宗様化のひとつの指標となる祖堂と祠堂も、法堂と同様に道家の計画にはなかった可能性がおおきい。このように考えると、法堂の建設は、単なる着工の遅れというのではなく、東福寺の禅宗寺院としての方向づけが確定した結果として、はじめて企画された工事だったのだと理解できるのである。

この推測は東福寺の仏殿と法堂の配置関係の不自然さ、すなわち両堂が異常に接近しすぎている¹⁴⁾事実から裏付けできよう。この異様な配置は、最初の配置計画に法堂が念頭に入っていなかったこと、いいかえれば道家の造寺計画は楼門と仏殿だけを中核としたことに起因したと考えられる。もし当初から法堂建設が計画されていたとしたら、このような異様な配置にはならなかった筈である。

ともかく法堂は文永10年には落成し、ここに東福寺の禅宗寺院としての体裁がはじめて備わるのである。さらにその2年後の建治元(1275)年9月には、道家の三男一条実経(1223~84)が、子家経はじめ諸官従を引き連れて、東福寺に入り、円爾に請うて上堂、入室札を行なっている¹⁵⁾。このことは檀主である一条家が、名実ともに東福寺が禅宗寺院であることを世間に告知したものであり、ここにおいて東福寺は禅宗寺院として認知されたといえるのである。弘安3(1280)年6月の、円爾による東福寺規式¹⁶⁾には「仏鑑禅師叢林規式をもって一期(一生)之を遵行し、永く退転あるべからず」とあって、そこでは天台真言色は払拭されてしまっている。

3. 造営の実務者たち

禅宗寺院として確立した東福寺の造営運営上の実務は、14世紀の諸史料が示すように、修造司を常置執務者とし、造営奉行を中心にする知事僧たちによる臨時的機構において行われた¹⁷⁾。しかし、そうした禅院内部の造営機構が東福寺に当初から備わっていたとは考えがた

い。弘長三年(1263)の「三聖寺規式」、弘安三年(1280)の「東福寺壁書」、「普門院常楽庵条々規式」¹⁸⁾などからは、そうした機構の存在は窺いがたいのである。では、創立期においては、造営の実務は誰が担ったのであろうか。残念ながら、そのことを直接示す史料は見出せない。しかしこの問題は、後に扱う工匠の問題にも重要な意味をもつので、推定の域を出るものでないとしても、及ぶかぎり論及しておきたい。

道家が祖父兼実から受継いだ最勝金剛院は、堂廊と御所を付属させた本堂、塔婆、鐘楼、僧房(護摩堂)という構成をもつものであった¹⁹⁾。その規模は明らかでないが、堂廊や御所が付属しているというところからすると、本堂はそれほどのもとも思えない。おそらく常住する僧数もすくなく、それ自体としての修造組織をもたなかったろう。となると、五丈の高さをもつ大釈迦如来坐像を本尊とする仏殿の造営は、それまでの最勝金剛院からの質量ともどもの脱皮を意味するものであって、そこではその造営のための造営組織が設定されたに違いないのである。

残念ながら、東福寺関係の史料にはこれに関することは見出せない。そこで、類例として摂関家の重要な氏寺である法成寺や平等院の同時代の場合はどうであったかを調べ、そこから類推することにしたい。

まず法成寺であるが、ここには寺務を司る別当がおかれ、その下に修理別当、執行などがいて造営や修理に当たるのが建前であり、それに付属する修理所や造営料所が常置されていた²⁰⁾。文治2(1186)年、同寺の修理につき、氏長者藤原兼実は、修理別当聖顕と執行泰覚の兩人が分担して奉行すべきことを命じ、金堂を泰覚が無量寿院を聖顕が担当することになったが²¹⁾、これなどこの原則にしたがった処置なのであった。しかし、この兩人が修理奉行としてどれほどの実効をあげたかは明らかでなく、13世紀になると寺務による修造には殆ど期待できないのが実態であった。天福元(1233)年、金堂の北にたつ北御堂が顛倒したのは寺務の怠慢によるものであったとされる²²⁾。こうした寺務の無力化を補填したのは、主として長者家の家司たちであった。文治5(1189)年に大風で同寺が大破したとき、兼実の家司高階資泰にその修理のことを命じ、葉室宗頼をその奉行とし、行事侍等に破損状況を実検させている²³⁾。寛喜2(1230)年、橘知宣は奉行として短期間に材木を集めて法成寺の修理を行ない、宮廷で評判になった²⁴⁾。貞永元(1232)年に西面八足門が転倒したときは、下家司である左史生康職がその実地検分をおこなっている²⁵⁾。最勝金剛院仏殿造営の5年後の寛元4(1246)年には、法成寺と平等院の両寺の修理が氏長者一条実経を願主として行なわれたが、法成寺の事始では、家司座がもうけられていて、一条家の家政機関がその実務の一部を担当していることが

推定できる。この修理に際しては寺領が修理工に充てられ、家司と考えられる行範がその沙汰をした。この事始では木工二座、檜皮工、壁工等が出仕しているが、これらは寺に所属する工匠たちであろう²⁶⁾。この場合は、寺家の修理機構と長者家の家政機関中の適任者がその任に当たっているのであるが、その年末に造営実務に怠慢であったとして執行泰舜は罷免され、親覺法眼に交替している。実際には寺務側はほとんど造営実務能力を喪失してしまっていたといつてよい。

平等院の場合も執行が修理実務を担当していた。建治元(1275)年、平等院執行範が寺の修理を命じられている²⁷⁾。しかし修理の実務に関しては、執行より家司の方が多く登場する。文暦元(1234)年の阿弥陀堂の修理は九条道家の家司中原行兼の沙汰として行なわれたことが知られている²⁸⁾。一条実経の時代の寛元4年の修理では、葉室定嗣が修造奉行を辞退し、藤原高俊が任命されている²⁹⁾が、彼らはともに実経の家司であった。

以上のような法成寺、平等院の事例からすると、最勝金剛院の新仏殿から東福寺の創営にいたる造営の場合にも、氏長者家である九条家の家司が参画した可能性が高いことが認められよう。その候補者として挙げられるのは中原行範と慶政上人である。

〔中原行範〕 寛元2(1244)年秋に、上野国長楽寺に師栄朝を訪問する円爾を、道家の命をうけて護衛同行した備中守行範という人物がいる³⁰⁾。ところで、上述の寛元4(1246)年の一条実経による法成寺修理の沙汰人であったのも行範という人であった。この人は同年の4月にも、一条実経家の御神祭に際し、御所良方に建てる神殿を造進している³¹⁾。道家と実経が父子の間柄にあることからすると、備中守行範と後者の行範とは同一人物とみてよいであろう。その人物像は、九条道家の日記『玉蘂』において若干明らかにすることができる。まづ、嘉禎3(1237)年4月16日条に、賀茂祭見物用の七間一面の檜皮葺御棧敷の営作担当者として「目代左大夫尉行範」が現れる。嘉禎4年正月9日条では西園寺公経の使者として道家に会い、行範がその実務を担当したらしい閑院修理の件について述べている。同年2月13日条では、道家の孫娘の五十日の祝に納殿預として現れ、同年4月10日条では道家子の福王丸の仁和寺入寺の行列に「檢非違使 五位尉中原行範」として参仕している。以上のことから、行範は中原氏で、檢非違使を本務とする官吏であること、九条道家と一条実経の父子に、また西園寺公経に家司として仕えていたことが知られる。中原行範が、とくに建築経営の実務面に長じた人物であったことは、上述の僅かな史料からだけでも十分に推察できるところであろう。

行範が中原氏だとすると、上述の平等院阿弥陀堂修理の沙汰人中原行兼のことが見過せなくなる。行兼は本務

を檢非違使とする官吏であるが、また「亜相(西園寺公経)専一の者なり」といわれた西園寺公経の腹心の家司であった。九条道家が西園寺公経の娘倫子と結婚すると、道家の用も務めている。貞永元(1232)年、高山寺の明恵上人が最期を迎えたとき、公経の使者として明恵を見舞ったのも行兼であった³²⁾。これより前、嘉禄3(1227)年に覺嚴法眼の沙汰のもとに高山寺に三重塔が建立されたとき、公経が中心となってその本尊と脇仏の五尊像を造るが、行兼も脇仏のひとつの文殊師利菩薩像を定慶に造らせている³³⁾。

行範とこの行兼とは、官歴や名前の類似性から親子と推定できる。行兼も建築経営の能力をもった人物であったから、行範の建築経営の能力は親譲りのものなのであった。もし、九条家の家司たちの中から、新仏殿の造営を担当できるであろう家司を求めるとしたら、この行兼と行範が最適候補者として浮かび上がるのである。そして円爾との関わりからいって、東福寺時代の造営には行範が参与したと見たいところである。

〔慶政上人〕 円爾その人も勸進上人的な側面をもって造営事業に活躍した人だった³⁴⁾が、しかし、前述した経緯からみて、円爾が創成期の造営事業に関与できたとは考えられない。だが、勸進上人であって、東福寺の造営に関与した可能性が高い人がある。それは願主である道家と強い繋がりをもっていた慶政上人である。慶政は先述の比良山託宣に介在し、道家による最勝光院から東福寺への拡大転換に一役かったと推定される人物である。慶政は房号を証月房といい、園城寺において修学した僧で、文治5(1189)年に生まれ、文永5(1268)年10月に80歳で入寂している³⁵⁾。出自は明らかでないが堀池春峰氏は九条道家の兄に当たる人と推定されており³⁶⁾、事実九条家との関係は密接なものがあつた。松尾に法華山寺を開き、建歴3(1214)年ころに渡宋、建保7(1219)年以前に帰朝している。法隆寺東院の舍利殿絵殿修理の願主は慶政上人とされ、建保7年から嘉禎3(1237)年にかけての間、断続的ではあるが九条家の援助のもとに願主となって法隆寺東院の諸堂修理に大きな功績をのこした³⁷⁾。くだつては、東福寺の仏殿造営が行われていたころ、道家の外孫にあたる四条上皇の清涼殿を独力で三井寺興乗院に移築して³⁸⁾、ここでも道家との深い繋がりがある。このような建築経営に堪能で、宋様に関する知識もあつたはずの慶政が、道家の東福寺創営に関わらなかったとは考えがたい。慶政も道家の家司的存在と考えることができ、その意味では中原行範と同列におくことができよう。

〔寺内造営機構〕 では、九条家という檀主側からはなれて、東福寺としての独自の造営組織はいつごろから存在したのだろうか。そうした機構の存在を伺わせる「修造司」なる役職は、貞和2(1346)年の大工左衛門大夫弘

光への畠三段の給分を知行せしめた東福寺役者連署状に現れるのが初見である³⁹⁾。しかし、建武3(1336)年に淡路国都志郷領家職が東福寺造営料として東福寺長老に与えられ⁴⁰⁾、建武5年7月にはその地頭分が東福寺侍者慧料から大工左衛門大夫に与えられている⁴¹⁾から、建武ころには、造営にかんする東福寺側の主体性は確立していたと見られる。したがって、その主体性の檀主側から東福寺側への移行は、これよりは早い時期に、おそらくは13世紀末から14世紀始めのころになされたと推定してよいであろう。

4. 創立期の番匠大工たち

「東福寺大工広定請文案」は、東福寺創成期の番匠大工たちに関する唯一の史料であるが、その史料内容にはおのずと限りがある。したがって、議論を深めるために、この史料に現われる番匠大工たちを、その周辺関係を含めて検討してゆきたい。さて、「請文案」に現われる番匠大工たちは、つぎのような四期にグループ分けすることができる。すなわち、[第一期] 物部為国と末光、[第二期] 末広、[第三期] 定国、定吉、広定、[第四期] 広定以降、である。

[第一期] 物部為国と末光 1230～40年代

物部為国「請文案」は、東福寺仏殿を造営した大工を物部為国とする。このことについて広定は「其の隠れなし」と述べているので、為国に関わったことは間違いない事実であろう。

物部為国は、高野山奥之院拝殿の造営記録に⁴²⁾、伊勢権大夫とされ、鎌倉初期の東大寺再建工事において、桜嶋国宗とともに棟梁的な役割を果たした番匠大工伊勢権守物部為里と系譜的に繋がりのある大工と考えられている⁴³⁾。

東福寺仏殿以外にかれが関わったものとして、①高野山奥之院拝殿(1223)の造替、②宇治平等院中堂の修理、③東寺での造営、の三つが今までに知られている。

① 高野山奥院拝殿の運営⁴⁴⁾は、奥院拝殿が創立されて以来五度目のものであるが、「古御拝殿ノ礎石小故、今度ハ以テ大ナル石ヲ而可レ為レ礎也。」と記され、礎石から新しくした新築工事であった。貞応2(1223)年の正月に着工して4月20日に完成している。造営の願主は、静遍僧都⁴⁵⁾で、承久の乱後に実権を握った皇家や一部の貴族たちによって支援された。九条道家は表向きこの造営には姿を現していないが、貞応元年十月に道家の祖父兼実の兄松殿禅定基房が80歳を越えた老齢をおして基家らとともに二度目の参詣を遂げて出家していることが注目される。基家は道家の弟で、静遍僧都は基家の妻の兄弟である。こうしてみると、この造営には、表に出ないものの、その背後には九条家一門の援助があったと考えられる。

② 平等院鳳凰堂の修理は、文暦元年から2年(1234—35)にかけて行われた。この修理に関する史料は、明治36年から40年にかけて実施された、鳳凰堂の修理の際に発見された外陣柱方立の小穴の中の墨書⁴⁶⁾だけである。

文暦元年霜月廿九日、為玉櫛御庄預所口老岐守中原朝臣行兼之沙汰、被直此御堂、同二年三月十五日、重被直柱出入、雑掌沙門定心、大工伊勢大夫物部為国(『大日本古文書』による)

この修理の施主は氏長者である九条道家である。しかし、道家は日記『玉葉』にこの修理のことを記していないから、とくに重要な修理事業とはみなされていないようである。

この平等院修理と関連して注意しておきたいのは、道家の祖父兼実が、建久元(1190)年に行なった平等院中堂の修理である。兼実はこの工事のために「南都工を召し」ている⁴⁷⁾。したがって、すくなくともこのころから九条家と南都工との結び付きがあったことが判る。この南都工の実体は不明であるが、つぎに記すように為国もまた南都工と呼ばれていたらしい事実がある。

③ 東寺での造営 為国の東寺との関わりを示すのは下記の史料⁴⁸⁾である。

一、東寺造営之南都工等事、早任為国之例、可令勤仕公役者也。

いつ為国が東寺の造営に関わったのか、この史料は明らかにしないが、文永・弘安の東寺五重塔造営以前のことであることはほぼ確かで、13世紀前半期のことと推定できる。この時期の東寺の重要な造営事業としては、仁治2(1241)年前後に行われた、灌頂院の護摩堂と七間僧房の造営がある。

此両三年東寺修理、三長者僧正沙汰殊被造営之、其内灌頂堂後立五間護摩堂、其西立七間僧房、是則追寛平法皇往蹤、於此所可有禅定殿下御入壇事、其間依為要須、新被造加此堂舎成⁴⁹⁾。

この造営は東寺三長者行遍の沙汰として行われたが、道家の受灌頂のための造営であり、とうぜん道家側からの援助があったはずである⁵⁰⁾。為国は、この造営に関わったのであろう。

以上のことと東福寺仏殿とを合わせて為国が関与したことが判明する造営を年代順に挙げると、

a. 1233年	高野山奥院拝殿	静遍沙汰
b. 1234-35	平等院鳳凰堂修理	中原行兼奉行
c. ---1239	最勝金剛院仏殿荒立	
d. 1241頃	東寺護摩堂・僧房造営	行遍沙汰

となる。b、cは道家が施主であることの明確なもの、a、dはかかわりが深いと推定できるものである。このように、為国は九条道家が関係する造営に一度ならず現れるのである。したがって、為国は東福寺仏殿造営のためにとくに招かれたというよりも、道家が平生から「召し仕う」⁵¹⁾大工なのであったと考えるべきである。

末光「請文案」の広定の陳述によると、広定の論争相手の末康は、末光が草創の当初の大工職であったと述べている。これにたいし、広定は当寺仏殿は物部為國が建てたことは隠れのない事であり、開山円爾の時代は末広が諸造営に当たったのだとして、末光大工職論を否定するのである。とはいえ、広定の論は、末光が東福寺の造営に関わらなかったのだと主張しているわけではない。そもそも創立期における大工職の存在すら疑わしいのだから、広定の言い分をそのまま鵜呑みに信用することはできないであろう。末光も創立当初の造営に何らかのかたちで参与していたというのが事実に近いのではないと思われる。

末光の出自を示すような史料はいまのところない。しかし、同時代の同名の大工としては、建保7(1219)年に法隆寺の舍利殿絵殿を建てた大工土佐権守平末光⁵²⁾が浮かびあがる。舍利殿絵殿修理の願主とされる慶政上人は先述したように、道家の兄とも推定され、九条家に密接な関係をもった人物であるから、舍利殿絵殿の大工末光を道家の造寺のために提供したとしても不自然ではない。むしろ、末光はもともと九条家に結びついた大工であった可能性すら考えられる⁵³⁾。しかし、最勝光院仏殿が造営された延応ころは舍利殿絵殿修理の20年後であり、末光はすでに老齢であったろうから、かりに東福寺に参画したとしても、名目上だけであったかもしれない。

さらにすこし範囲を広げて、「末」を片字とする名の大工を同時代の京都に求めると、まず、高山寺において覚嚴法眼の沙汰のもとに、嘉祿3(1227)年から寛喜年中(1229~32)に及んで三重宝塔を、また嘉禎2(1236)年に十三重塔を建てたのは大工末弘がいる。この高山寺三重塔の造営は、西園寺公経の援助下におこなわれ、前述したように中原行兼もその造像にかかわっている。なお、この塔は中間8尺、脇間7尺で、辺長が22尺の三重塔としては大きな規模のものであるから、その大工は一流の工匠であったであろう⁵⁴⁾。

また、承元2(1208)年5月15日に焼けた法勝寺九重塔の再建を担当した大工末包がいる。建暦2年のものと推定される榮西書状⁵⁵⁾は、西園寺公経がこの塔の奉行のとき、大工は末包ひとりであったが、榮西が奉行になってから工事を促進するため京工を召加えたところ、末包が殺傷沙汰に及んだので排除したとしている。この文脈からすると、末包は京工ではなく、したがって多分に奈良系の大工ということになる。末包は塔再建以前に西園寺公経に接近していたのであろう。

このように西園寺公経の周辺には末包、末弘といった「末」系の番匠大工が存在したことが推定できる。そうすると道家と西園寺公経との関係、とくに造営事業に堪能な家司を共有していたという関係からすると、東福寺の造営にこの「末」系の番匠大工が導入された可能性も

また認められるところであろう。この時代の奈良には「末」系の大工が多くいる⁵⁶⁾ので、末包、末弘も奈良系の大工だったかもしれない。東大寺再建の大事業が一段落すると、恒常的な仕事を求めて奈良系大工が京都の貴族の保護下に移ってくるものがあつたと推定されるが、彼らもその範疇に属するものであつたのだろう。この点では、物部為國もその範疇にはいるであろう。仏師の慶派が、まさに同じ時代にその活動拠点を奈良から京都に移していることなどを視界に入れてみると、この推測も十分成り立つのではあるまいか。

以上をもとにして、すこし大胆に考えると、すくなくとも13世紀前半の時点においては、九条家と西園寺家というサークルに「召し仕」われていた大工たちの中に、「末」を通字とした番匠大工の一派がいたとの想定ができよう。

[第二期] 末広 ~1280年代

「請文案」によると、末広は鐘楼、経蔵、廊下、法堂、祖師堂、檀那堂を建て、円爾時代の東福寺の造営に重要な役割を果たした。無関普門の世代に没したというから、1280年代まで生きていた人である。末光と末広との関係については、末広の曾の末康が大工職の正統性をその家譜性にもとめて論じて、末光を当初大工職としていることから、末光と末広は、家系的な繋がりをもっていた可能性が濃い。末広の東福寺以外での活動は、管見の限りでは知られていない。末広の時代は、無関普門その他の来朝僧、入宋僧が相つぎ、本格的な禅宗と宋建築がもたらされた時期であったことは留意しておかなければなるまい。

[第三期] 定国、定吉、広定 1290年代

広定の言にしたがうと、末広は1290年前後のころに没したあと、定吉が大工職に補任され、定吉が死ぬと定国が大工職に補任された。広定は東福寺4世白雲慧暎(-1297.12.25寂)の世代(1292-97)に大工職に補任された。末広時代の東福寺の造営は、定吉、定国、広定などの番匠が末広に従っておこなわれていた。定国と広定は実の親子であり、また広定は末広を養父としていた。そして定国は末広の引頭であった。末広が没する前後に定国は、末広の引頭として、温室(浴室)の造営を担当している。広定は末広、定吉、定国の三代に仕えたというから、法堂造営も経験したであろう。東福寺の大工職の競争者となって現れる末康は末広の曾で、おそらく老年になった広定に替わろうとしたものであろう。末康は徳治2年(1307)から正和4年(1315)にかけて、東寺の護摩堂や大湯屋の造営および食堂弘葺を行った大勧進方大工であった人物である⁵⁷⁾。

この末康と広定との大工職争論は、重大な意味をもつと考えられる。この争論は、結果的には広定の勝に帰したようである。では末広の婿であるという系譜上の有利

さと、東寺大工職にあって技術的にも劣らないものをもっていたと思われる末康が、なぜ東福寺大工職を得られなかったのだろうか。そこには技術の質の問題が介在していたのではないかと想像される。すなわち、広定はすでに東福寺にとっての建築様式となりつつあった禅宗様に通じていたのに、末康にはそれがなかったのではないと思われるのである。

ともかく13世紀末ころの東福寺では、「定」系の大工一族が「末」系大工に仕えるかたちで存在していたが、やがて東福寺に対する長年の実績と「末」系大工との養父子関係の締結、そしておそらく禅宗様の習熟を梃子にして大工職を獲得するようになったと考えられる。

[第四期] 広定以降 弘(広)系大工による独占

東福寺は14世紀にはいって元応元(1319)年に火災にあい、建武元(1334)年に再び焼け、建武3年に仮仏殿まで焼いてしまい、全山ほとんど灰燼に帰した。為国から広定まで営々と建設してきた建物群は、ここにほとんど姿を消してしまった。その復興事業は建武3年冬にはじまり、造仏と諸堂造営の見積が大仏師院信法印と大工左衛門尉弘光から出されている⁵⁸⁾。弘光は当時の東福寺大工職にあったと考えられるが、広定とはほぼ一世代の開きがあるから、広定の次代または次々代の代大工職と推定できる。そして「広」は「弘」に通じるから、広定と弘光は系譜的につながりをもつ可能性は高い。弘光以降の東福寺大工職の継承順は

弘光——□□——弘友——弘長

のようであったと推定され⁵⁹⁾、ほぼ確実に「弘」名の大工に独占されている。創立期以降、為国—末広—一定国と系統が転々と移動した東福寺の大工職は、広定より後は広定の系統による血縁的継承形態に定着したようである。広定はこの「弘」系の大工家系の端緒になった人物と考えられる。

なお、この間、北隣に所在した十刹寺院三聖寺の大工職は行次—対馬三郎行家—藤原行正と「行」名の大工家によって占有されていた⁶⁰⁾。

5. 東福寺における禅宗様の確立とその大工

東福寺に遺るいくつかの中世建築遺構は、すこぶる興味深い存在形態を示している。三門・仏殿は大仏様、法堂をはじめ禅堂・東司・浴室は禅宗様、六波羅門・月下門などの門は和様という、三種類の様式の建築がある規則性を見せながら展開しているのである。すなわち、伽藍の中心部から周辺部にむかって、建築の様式が大仏様—禅宗様—和様と変化するのである。ここでいう大仏様、禅宗様はおおまかに分けた場合の基準としていっているのであって、三門が大仏様と禅宗様の折衷形式のものであることは明らかだが、太田博太郎氏のいわれるように⁶¹⁾、構造原理の面からは大仏様の範疇に属させること

ができることであり、他もこうした基準で様式分をしている。なお、仏殿、法堂は明治10年代まで存在しており、その平面や構造形式は知られている⁶²⁾ので、ここでは現存するものとして加えた。

このように大仏様を中心にして、三様式が併存するという東福寺の建築の特徴は、東福寺の創成事情からある程度の説明はできる。すなわち、和様を基底にもつ祖先伝来の寺地の一画に、道家が大仏様の建築を導入し、実経・円爾の時代以降に禅宗様の建築が建てられるようになったという歴史があったわけだが、それがそのまま建築の存在形態に反映しているのである。創建時の建築が、一度は失われたにも拘らず、なおこの特徴が持続したのは、東福寺が五山寺院でありながら一方では摂関家の檀寺であり続けたこと、とりわけ基幹となる建築の再建が、まだ摂関家の影響力が残っている時期に行われたことによると考えられる。

この東福寺の建築の特徴というのは、あくまでも仮説であって、創立期の三門・仏殿が大仏様建築であったという具体的な証拠は存在しない。しかし、上述した創成期の東福寺諸大工の系統は、この三様式の存在と下のようによく対応もするのである。

和様………末光………法隆寺系または三井寺系大工

大仏様………物部為国……東大寺重源系の大工

禅宗様………末広以降……東福寺大工

いわば、三様式の存在問題は、創成期に活躍した大工たちの系統からも説明できるのであり、三様式の存在した可能性は高いといえる。

このように、仮説の域を出るものではないが、東福寺における三様式の併存現象は、この寺院においては禅宗寺院への転換と禅宗様式の採用が、その創成途中においてなされたことと大きく関係しているとの想定を導く。こうした仮説を踏まえ、当初の設定課題にもどって、東福寺において禅宗様式が何時どのようにして成立したかについての私案を述べてみたい。

東福寺の建築における禅宗様採用の時期は、前述したように、文永の法堂創建時である。この時期すなわち1270年代前半を、東福寺での禅宗様成立の画期とすることができる。しかしながら、この時から全面的に禅宗様が確立したとはいき切れないものがある。

南北朝から室町時代前期を通じて、東福寺の大工職は「弘」名系によって独占的に世襲継承されていたが、それは広定に発した可能性があることは推定しておいた。この「弘」名系の独占は、禅宗様技術の家系的なものを軸にした継承形態の存在を思わせるが、この継承形態はまた寺家側によっても支えられていたであろう。そしてこうした寺家の様式選択の主体性の確立を窺わせる目安としての修造司制度の確立は、確実には14世紀はじめころであった⁶³⁾。この東福寺大工職の世襲化と修造司制度

の確立は、時期的にも同時性を示し、両者はほぼ表裏一体の関係にあったことが知れる。そうした安定化の初めに位置する広定の場合は、しかし、末康との大工職相論が物語るように、なお絶対的な安定には至っていなかったらしいのである。そうであれば、その前代である末広の時代にあってはなおさらであったろう。

末広は、道家没後、円爾が長老として普門寺にあり、また建仁寺の住持としてその再建にも関わっていたころ、すなわち 1250 年代に活動をはじめ、鐘樓・経蔵を建てている。円爾が一条実経によって常楽庵を与えられ、東福寺における主導性を確立したと考えられる 1270 年前後に、法堂と祖堂・祠堂の造営を行なっている。弘安 3 (1280) 年 9 月 15 日の円爾による御祈禱等注進文⁶⁴⁾には、祈禱場所として大仏殿、僧堂、山門、成就宮、常楽庵(閣上)などが挙げられ、これらの建物が当時存在したことが判るが、末広の没年は 1281 年以降と考えられるから、年譜や請文案には現れないが末広は僧堂も建てていたと考えられる。すなわち、法堂、僧堂という禅宗寺院の本質を構成する建築は、末広を大工として建てられたと見られる。この時の法堂、僧堂の様式は明らかでないものの、再建後のものが前例にならったとすれば、禅宗様主体のものであったと考えられる。末広の時代の直前には鎌倉の建長寺の造営が宋僧蘭溪道隆のもとで始まっていたし、東福寺にも文応元(1260)年に宋僧元菴普寧が訪れ、弘長 2 (1262) 年には無関普門が 12 年におよぶ宋での修行を終えて戻ってきていた⁶⁵⁾。したがって、この時期には禅宗建築に関する資料や知識はかなり豊かになっていたはずであるが、末広はそれらを吸収できる最も有利な立場にいた。

このように末広には禅宗様を京都で最初に具現した技術者としての栄誉が与えられるが、三門付属の鐘樓・経蔵が大仏様であったとすれば、彼は大仏様による建築体験から出発した大工であり、その影響からどの程度抜け出していたかに、問題がのこされている。

広定は、自身でいうように末広の下で修行し、法堂以下の作事に従って、東福寺の中で確立しつつあった禅宗様を体得した大工であった。広定が末広の養子となり、大工職をえたのは、おそらくこの広定の禅宗様技術者としての正統性が寺側からも認知されたからであろう。広定の系統が、広定以降独占継承されたのには、大工職の家系の継承が広く行われ始めていたという以上の理由、すなわち禅宗様を伝承しかつ指導できる家系という認知が、背景として存在したのではないかと思われる。その意味では広定の方に禅宗様を定着させた大工としての評価が与えられるべきかも知れないのである。

6. 結 び

東福寺は当初から禅寺であったのではなく、創成期の

中途から方向転換をして禅利になったのであった。文永の法堂建立は、歴史上その転換の指標となる出来事であった。これを境にして、この寺にはその建築の様式にも変化が生じたと推定される。具体的には、大仏様から禅宗様への転換である。史料から推測される大工の存在形態もそれに照応して変化したと考えられる。この転換以前は、まだ寺院としての造営組織が形成されず、檀主の家司層を中心とした経営組織のもとで、檀主が召仕う大工たちによって技術陣が構成されていた段階にあった。創立当初期の大工であったらしい物部為国や末光は、東福寺創立以前から九条家に召仕われていた大工であったと考えられる。仏殿(おそらく三門も)をたてた大工為国は、大仏様系の技術を継承するものであったから、これらの建築に大仏様が用いられたのは、自然の成行きであったといえる。当然、宋様を望んだという檀主九条道家の意向もおおきく作用したであろう。その宋様が禅宗様でなかったのは何故かは問題として残される。禅宗様の採用あるいは選択は、専門の禅宗道場をめざす円爾とその弟子たち、それを支持した一条実経によってなされた。その造営に当たったのは末広であるが、かれはすくなくとも東福寺においての禅宗様式をはじめて試行した工匠であったと考えられる。そして、末広時代の試行を経て、末広が育てた工匠たちの間において、禅宗様の建築が、寺院側の造営組織の整備化と並行しつつ、確立されてきたと推定される。広定はその中心に位置した大工であって、彼が確立した技術系統が正統なものと寺院側によっても認知され(この時点では檀主側の趣向は寺院の建築に影響を及ぼすことはなくなっていたと考えられる)、それによって別種の技術系統の大工の大工職競望に打ち勝ち、東福寺大工職をその家系に継承させてゆくことができた。

以上はこの論考で展開した様々の推論にもとづいた仮説であり、本論文の結論となるものである。ここでは東福寺だけを扱ったので、わが国の建築界において禅宗様はいづれ確立したのかといった問題までには及ぶことができない。しかし、この問題に東福寺は無縁ではないので、すこし私見を述べておきたい。それは東福寺と建長寺との関わりである。鎌倉の建長寺が創建当初から確立された禅宗様の建築で造営されていたとすれば、上に推測したような、東福寺の禅宗様化の動きはかなり鈍重なものであったといわざるをえない。道家その人は東福寺には宋様を指向していたように、新しい様式に鈍感であったとは思えない。ところが、鎌倉政権とも近く、先端文化に早く接することができる立場にいたにもかかわらず、道家と禅宗様との明確な接点は認めがたいのである。ここからひきだせる推論は、確立した禅宗様の実現と採用は、建長寺創建時期よりもっと遅れるのではないかということである⁶⁶⁾。もし、そうだとすれば、13 世紀後半

の東福寺における建築の展開は、わが国において禅宗様が確立されてゆく過程の重要な一型を示すものに他ならないといえるであろう。

田中淡氏は創建期東福寺の建築様式を、栄西の新様式とともに、広義的には重源の大仏様に次ぐ第二期の中世の新様式として規定される中間的段階とし、それはまた中世和様内部の変化と対応している現象であるとされた⁶⁷⁾。創建期東福寺の建築様式なるものの実態は必ずしも明らかとはいえないが、13世紀の中葉が新様式にとっても中世和様によっても模索の時代であったという氏の指摘は重要である。この小論は東福寺における、その模索と変動の状態を、工匠史的側面からいくぶんなりとも明らかにすることを試みたのである。

注

- 1) 東福寺の建築と大工とを論じたものとして、太田博太郎『中世の建築』（彰国社、1957年、五 東福寺の項、のち日本建築史論集Ⅲ『社寺建築の研究』岩波書店、1986年に所収）、関口欣也『五山と禅院』（名宝日本の美術、第13巻、1983年）がある。しかし、大工の問題では、いずれも東大寺大工との関連を説くのみで、それ以上の論及はなされていない。
- 2) 東福寺の役割については、船岡誠『日本禅宗の成立』（吉川弘文館、1987年）を参照。
- 3) 太田博太郎前掲書。杉山信三『藤原氏の氏寺とその院家』（奈良文化財研究所、学報告書第19冊、昭和43年）七道家の東福寺の項。
- 4) 大日本古文書、『東福寺文書之一』沙弥行惠家領処分状案。『九条家文書一』九条道家初度処分状案。
- 5) 「聖一国師年譜」、大日本仏教全書。
- 6) 仲村 研、「東福寺大工関係の新史料」史林43-2、1960年。のち『中世地域史の研究』（高科書店、1988年）に所収。
- 7) 惣処分作成過程に関する検討は今後の課題である。
- 8) 杉山前掲論文
- 9) 沙門慶政記の「比良山霊託記」や「聖一国師年譜」。このころ道家と禅僧との交渉はまだなかったと考えられる。
- 10) 東福寺の名称の初出は寛元4年(1246)である。すなわち、筑後田代文書、寛元4年4月12日付の六波羅下文案（『鎌倉遺文』6663号）および同年7月16日の道家の春日社願文（『大日本史料』5-20）に「東福寺」が現れる。
- 11) 注10）参照。
- 12) 「聖一国師年譜」による。円爾の普門院入寺の年月を明確にする史料はない。普門院は覚縁が建立したものを、造営半ばで覚縁が没したので、道家が円爾に別庵として与えたものである。円爾とその弟子本智房（正堂俊顕とされる）によって完成された。室町時代末期に廃絶したが、福山敏男氏は月下門は普門院の四足門であろうと推測している（『東福寺月下門』、Museum 90、昭和33年。『福山敏男著作集』三に所収）。但し円爾の「普門院造作記録」には四足門と二字の中門があり、中門のひとつは回廊に付くものとして除外できるとしても、なお二つの門が月下門の該当候補になるわけである。四足門は覚縁によるもの、中門は円爾によるものである。月下門がそのどちらに当るかは、初期東福寺の建築様式論にとって重要な問題である。
- 13) 土地堂・祖師堂の問題については、関口欣也「中世禅宗様仏堂の平面（Ⅰ）」（日本建築学会論文報告集、第110号、1985年）を参照。
- 14) 仏殿と法堂の間隔は、七間半である。
- 15) 「聖一国師年譜」
- 16) 東福寺文書22 円爾東福寺規式（開山国師壁書）
- 17) 禅院の造営組織については、浜島一成「修造司について」、日本建築学会大会学術講演梗概集、1986年。同「禅院の造営方について」、同1988年。
- 18) 『東福寺誌』所収。
- 19) 九条兼実置文（『鎌倉遺文』1448）
- 20) 「兼仲卿記」建治元年11月7日条。『鎌倉遺文』12114。
- 21) 「玉葉」文治2年6月21日条。
- 22) 「明月記」天福下年3月30日条。
- 23) 「玉葉」文治5年8月11日条。
- 24) 「明月記」寛喜2年5月25日条。
- 25) 「洞院摂政記」貞永元年6月2日条。
- 26) 「葉黄記」寛元4年4月15日、同年12月14日条。
- 27) 「勘仲記」建治元年12月13日条。
- 28) 秋山光和「平等院鳳凰堂の文暦修理銘について」、美術史48、1963.8
- 29) 「葉黄記」寛元4年閏4月3日条。
- 30) 「聖一国師年譜」秋還野州受業。藤丞相道家差備仲刺吏行範。護衛以送。
- 31) 「葉黄記」寛元4年4月29日条。
- 32) 秋山前掲論文
- 33) 「高山寺縁起」
- 34) 円爾は東福寺に定住するまで、諸寺の造営幹事を勤めていた。
- 35) 橋本進吉「慶政上人伝考」（『大日本仏教全書』115、遊方伝叢書第三）
- 36) 堀池春峰「法隆寺と西山法華山寺慶政上人」、大和文化研究8-1、昭和38年。
- 37) 「古今一陽集」
- 38) 注36)。
- 39) 「川瀬家文書」32、東福寺領下井畠三段事。
- 40) 「九条家文書」六、1748-(2) 光嚴院院宣案。
- 41) 「川瀬家文書」31、東福寺領淡路国都志郷地頭分事。
- 42) 「奥院興廃記」
- 43) 大河直躬『番匠』42頁。
- 44) 「奥院興廃記」
- 45) 道家は承久2年3月23日から、法性寺において念仏法門文の講義を静遍から受けている（玉葉、ただし思文閣本では静通とする）。高野春秋によると静遍は、奥院造営にさいし高野平等心院に住んだとされる。この平等心院は西南院信助(九条兼実の外叔父)によって建立されていて、西南院の住職補任権は九条家のものであったという（和多秀乗「高野山と重源および観阿弥陀仏」、仏教芸術105、昭和51年1月）。とうぜん平等心院も九条家に関係が深かったはずである。この平等心院居住が事実とすれば、道家は静遍の奥院の事業を事実上助けていたことになる。ただし、この高野春秋の説には異説もあり、事実かどうかの判断は難しい。
- 46) 武田五一「平等院の装飾模様について」史学研究会講演集、明治41年11月。墨書銘は大日本古文書によった。なお、

この修理に関しては前掲秋山論文が詳しい。

- 47) 「玉葉」建久元年3月26日条。「平等院修理即直堂，召南都工令直也，僅不及一時，須曳直了，此間，余凝信力念誦，信心發起，感応何哉，可悦々々，今明日，能々調此堂事了，来廿九日可直廻廊等，其後又可直経蔵之由仰之。」
これについて福山敏男氏は「僅不及一時，須曳直了」とあるから，簡単な修理工事であったとしている（福山敏男『平等院図鑑』昭和22年1月）。しかし，そのような些細な工事のために，兼実是一心に念誦して仏の加護をもとめたのではあるまい。事實は逆で，この工事が極めて重大な意味をもっていたからこそ，兼実は上のような行為にでたのであろう。すなわち「曳直」とあるから，この工事は堂の位置の移動に係るものであった。おそらく前々から慎重に準備しておいてあって，この日，一時に満たない短時間の内に一気に堂を移動させたのであろう。このような工事であったとしたら，登用された南都工の比重も小さいものではなかった筈である。「南都工を召し」という記し方からは，この南都工と兼実との以前からの関係のあったことを思わせるし，またそうした信頼関係があって，兼実はこのような重大な工事を任せることができたのであろう。
- 48) 実躬卿記裏文書 修理職官等申条，『鎌倉遺文』19198。
- 49) 光明峰寺禅閣御灌頂記，『大日本史料』5-13。
- 50) 本朝高僧伝 54によると，行遍は延応元年に道家三子家実の病を尊勝法の祈禱を行って治癒させており，この功績から道家の信任が厚かったものと思われる。
- 51) 『承久記』に，土御門院に「召し仕はれける番匠一人」が院の流刑に御供したと記すように，主従関係をもった「召し仕う」番匠の存在は，この時代広く見られた。
- 52) 法隆寺東院舍利殿及び絵殿棟札，『古今一陽集』。
- 53) 慶政は嘉禄二年（1226）に法華山寺縁起（図書寮叢刊『諸寺縁起集』所収）を草している。また慶政は九条道家に頼んで四条上皇（道家の娘藻壁門院の子）の清涼殿を譲り受け，独力で三井寺に移している（三井寺興乗院等事）。この移築は，仁治3年（1242）の四条上皇の逝去後であるはずだから，道家の東福寺創建とはほぼ時を同じくしている。こうした道家と慶政との繋がりや，両者の造寺活動の同時性からみても，両者間に共通する建築工匠の存在を想定することは，けっして不当なことではなからう。
- 54) 『高山寺縁起』の造営記事は大工のことまで記していないのであるが，十三重塔と三重宝塔の大工末弘に限って挙

げているのは，末弘がとくに高名な大工であったか，ほんらい高山寺に属さず，有力者から派遣された大工であったからであろう。

- 55) 田中 稔氏が紹介された建暦二年と推定される栄西書状（同氏『覚遍本明本抄および紙背文書』，『奈良国立文化財研究所年報 1960』。『鎌倉遺文』に1869文書として所収）
- 56) 大河直躬「大工職についての覚書」（『建築史研究』27号）付載の「大和番匠一覧（鎌倉時代の部）」参照。
- 57) 末康は「東宝記」に東寺の護摩堂造営（1307）の大勧進大工，大湯屋造営（1315），食堂弘葺（1317）の大工として現われる。末康がどこに属していたかは明確ではないが，当時の大勧進は泉涌寺の素道上人であり，泉涌寺工であった可能性はある。
- 58) 『東福寺誌』。太田前掲論文。
- 59) 拙稿「東福寺大工の系譜について」，日本建築学会大会学術講演梗概集，1989年10月。
- 60) 仲村研前掲論文。注60）。
- 61) 太田前掲論文。
- 62) 太田前掲論文。また，筆者は近時，東京国立博物館において，江戸時代の東福寺の仏殿・三門・法堂・僧堂の木口図と建地割図に接したが，それらは仏殿・三門を大仏系様，法堂・僧堂を禅宗系様としている。これらの図については機会を見て紹介したい。
- 63) 注17）参照。
- 64) 慧日諸軸文書（『東福寺誌』所収）。
- 65) 『東福寺誌』。大宋諸山図とこうした宋僧や入宋僧との関係については注1）の関口論文参照。
- 66) 関口氏は禅宗様式を13世紀から14世紀半ごろの中国五山建築の様式に対応するものとする（前掲論文）。これからすると，建長ころ，すなわち13世紀前半期にすでに完全な禅宗様式の建築が鎌倉に建っていたとする論は容易には出せないだろう。建長寺が当初から専門禅宗道場であったとしても，その建築が禅宗様であったという保証はないのである。
- 67) 中世新様式の出現とその時期（太田博太郎博士還暦記念論文集『日本建築の特質』，中央公論美術出版，1976年），のち田中 淡『中国建築史の研究』，弘文堂，1989年に所収。

（1991年6月10日原稿受理，1991年11月12日採用決定）